

二〇二二年一月二十九日

亡き父の畑仕舞する帰郷かな	なつき
病窓へとどく運動会の声	むべ
コロナ禍の吟行に秋惜しみけり	こすもす
走り根に枕ならべし木の実かな	ぼんこ
錦繡や火口湖目指す尾根の道	わかば
からと音して翻る落葉かな	わかば
注連縄の古し大磐小鳥来る	ぼんこ
行雲を追ふ母の目の秋思かな	素秀
紫に暮れ行く山の秋惜しむ	はく子
喬木のセコイアいまし黄落期	こすもす
太梁の櫓を抜くる秋の風	なつき
点滴を終へし病窓黄落期	むべ
すがれ虫残念石のうしろより	かかし
言はでものその一言のうそ寒し	はく子
月白に屋根の影濃き倉庫街	素秀
トロツコの車窓過ぎゆく芒かな	宏虎

毎週句会秀句・みのもる選・二〇二二年一月二〇日